

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. See you ICU!
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

幽霊と比較文学

1. 文学の中の幽霊たち

洋の東西を問わず幽霊や怪物はしばしば文学に登場する。彼らは物語の中の反逆者として「主人」の統治に異議を唱える。例えば、お岩さんなどの日本の幽霊は、抑圧者への恨みを知らせようと現れ、抑圧されていた声を聞かせる。同様に西洋の怪物たちも、不当な扱いを受けた怒りを爆発させ復讐に走る。彼らは非現実の存在だが、文化的産物としては確かに存在し、一見安定してみえる世界の隙間を表す。物事がどこかうまく行っていないこと、表面がいかにも穏やかに見えても底流は荒れ狂っていること、を彼らは暴露するのである。

幽霊たちの身体的特徴はそのグロテスクさにある。これは社会が「身体」に対して抱いている恐怖を象徴していると言えるのではないだろうか。肉体を巡る人間の感情には欲望と恐怖がある。それは身体が命の源泉であると同時に、限界、腐敗、死の源泉でもあるからだ。欲望と恐怖を共に強く掻き立てる存在が「女性の」肉体であることは、有史以来、多くの文化で男性（および男性的な考え）が言論を支配してきたことと関係があるだろう。「人間」はしばしば英語のHeのように男性代名詞で受け、「男性」と同意とされてきた。つまり「女性」は「人間」と対比される謎の存在であり、従って欲望の対象とも恐怖の源ともなる。実際、これを反映して、文化表象としての幽霊や怪物たちには女性的な特徴を持つものが多い。そしてこの男性である「人間」と女性の「身体」との間に奇妙な愛憎関係が築かれてきたのである。女性の身体は、絵や彫刻、小説や映画など様々な媒体の中で、ある時は美しい天使のような存在として、またある時は醜い怪物として描かれてきた。「人間」は、女性の肉体をアートに変え異化して搾取することにより、「肉体」、ひいては「生死」をコントロールする錯覚を享受してきたのだ。

さて、ここでは東西の文学に登場する幽霊や怪物について検討してみよう。西洋文学と日本文学を同じ土俵で分析してよいものかと疑問に思う人もいるだろう。そこで、まずは比較文学の問題点について触れてみたい。

日本と西洋は当然ながら異なる歴史を持ち、従ってそれぞれの考え方も異なる。二つの文化を同じ視点から論じることは不可能であろう。というのも、ある理論を不用意に二つの文化に適用することは、一つの文化を別の文化に従属させてしまう危険があるからである。

このことを日本文化に則して考えてみよう。第二次世界大戦の後、日本は米国進駐軍の指導の下、独裁的軍事政権から脱却し、西洋のイデオロギーを取り入れて強大な経済力を発展させた。そして経済的成功がもたらした政治力によって、今では国際政治の場において大きな発言力を持つに至っている。もはや日本は「見られる側」(Object)ではなく「見る側」(Subject)となったのである。こうして、欧米各国と同様、世界労働市場において搾取する側となった日

本は、自らのことを「先進国」とみなし、東洋よりむしろ西洋に含めて考えるようになった。事実、今日の日本文化は一見するとアメリカやヨーロッパと何ら変わらない。米国のテレビ番組が放送され、米国ポップスが聴かれ、輸入洋書が読まれ、マクドナルドが賑わう。要するに、日本人は西洋のイデオロギーを受け入れ、西洋の視点で世界を見るようになったと言える。

見方によっては、これらすべては「進歩」であり「啓蒙による前進」であるともみなされかねない。しかし、これらには良からぬ副作用がある。このような極端な西洋化によって日本社会は、いわゆるアイデンティティーの危機 (Identity Crisis) , つまりはSubjectとObjectの立場の混乱という問題に直面したのである。説明してみよう。日本社会は、西洋の「テキスト」によって再教育されたと言っている。ところが、この「テキスト」が問題である。それは西洋によって作られ、西洋をSubject, 日本をObjectとして設定している。西洋が、日本社会を啓蒙し、かつて植民状態にあった他者 (Others) を自分たちの側に受け入れたとしても、その他者に西洋のSubjectと全く同じ地位を約束した訳ではないのだ。むしろ西洋は、他者があくまで他者であり続けることを望んでいるのではないだろうか。要するに、西洋が日本に課したテキストは二種類あったのだ。一つは帝国主義のテキストで、それによって西洋は日本をコントロールし、西洋のコピーとして作り変えようとした。もう一つはエドワード・サイードが「オリエンタリズム」と呼ぶところのものだ。このテキストは日本が西洋と「異なる」ことを期待する。多くの日本人は、自分はアメリカ人と同じ気分であるのに、「めがねに出っ歯」といった奇妙な日本人像を押し付けられて戸惑う。しかし他のアジア諸国に対しては妙な疎外感を感じる。実際の日本社会は、二つのテキストの狭間に落ち込んでしまい、自分というものを見失ってしまったのである。

幽霊や怪物について考えることは、このSubjectとObjectあるいはOthersの問題に深く関わることである。ニコール・キッドマン主演の『アザーズ』(The Others) という映画があるが、そこでも異界に追いやられた幽霊が扱われている。SubjectとObjectの狭間に迷い、Othersになりきれない日本人にとって、東西の文学と幽霊たちについて考えることは重要な意味を持つてくる。

特に女性にとってその重要性は二重であると言えるだろう。言葉を失ったObjectを巡る問題は、フェミニズムの大問題でもあるからだ。コロンビア大学教授のガヤトリ・スピヴァックは次のように述べている。

家父長制と帝国主義、主体構築と客体整理の狭間で、女性の姿は見えなくなってしまう。原初の純粋な無に戻るわけではない。激しい揺れの中で消えてしまうのだ。第三世界の女性は伝統と近代化の間に囚われ、形を失ってしまうのだ。

日本女性が「第三世界の女性」に含まれるとは言えないが、日本女性が言葉・発言力を失っ

た過程はここでの描写と酷似している。平安時代にはあれほど女性が文学の中心的立場にいたのに、近代以降は文学の表舞台から女性の数がぐんと減り、残った女性たちも「女流文学」とひとくくりにされた。女性が増えてきたとは言え、現代でも政治、経済、学問の世界を占め、公に発言する過半数は男性だ。しかし、これは日本の女性が何も言うべきことを持たないということの意味しない。彼女たちは何か発言したくとも、つい最近になるまでそのための適切な用具、機会を持ってこなかっただけにすぎない。

このように考えていくと、東西の幽霊・怪物文学を比較することはSubjectとObjectの複雑な関係に直面することであり、西洋のフェミニズム理論が助けとなることが見えてくる。西洋の視点を押し付けるタイプの理論は注意して避ける必要があるが、西洋のフェミニスト言説を利用することにあまりに消極的になり過ぎると、我々はジェンダー懐疑主義¹⁾に陥ってしまう危険がある。確かにジェンダーは人のアイデンティティーを構成する要素の一つに過ぎないが、ジェンダーなしに人間を考えることもできないし、ジェンダー中立でいることなどできないのだ。従ってここではできるだけ実用主義的な立場に立って、日本の文学に対しても適宜欧米の理論を用いていくことにする。

2. 権力の他者への依存

文学作品を見ると、同じような結末や権力構造が、繰り返し現れることに気づく。ミシェル・フーコーによれば、権力は「禁止」によってだけでなく、「再生産」によって作用するという。つまり、偶然に発生したり、長年にわたって築かれてきた現在の権力構造は、パフォーマンスによって反復、再生産されて初めて今後維持されるということである。カリフォルニア大学教授のジュディス・バトラーはこれをジェンダー・パフォーマンスティヴィティー (Gender Performativity) と呼ぶ。

There is not gender identity behind the expressions of gender; that identity is performatively constituted by the very [A] that are said to be its [B].

このような権力の発効の仕方に思いをはせると、神話や伝説、文学作品など、様々な形式の語りが、ここで言われるパフォーマンスにあたることに思い至る。「語り」が、ある権力構造を

1) 学問においてジェンダーを考慮に入れる必要性があるのかと疑問を呈する論調。なお、生まれる前に決定される生物学的な性の違い（セックス：生理学的な性差）に対して、出生後に周囲と関わりながら育つ中で、こうあるべきだとして身についた性差観念を「ジェンダー」（社会的・文化的な性差）という。

再生産し、不動のもののように見せているのだ。幽霊や怪物が登場する文学も、例に漏れずパフォーマティブな語りの一つである。そこでは、ある権力とそれを転覆させようとする力がせめぎ合う。多くの作品で、幽霊や怪物は最終的に退治されたり祓われたりして社会に秩序が戻る訳で、怪物や幽霊との戦いを通じて、権力が再構築されているのが見て取れる。

この構造は古代ギリシャのソポクレスによる『オイディプス王』にすでに見られる²⁾。

ロンドン大学教授のローラ・マルヴェイは、オイディプスがスフィンクスの謎に答える場面を分析し、「人間が自らの理性を核として、主体性を構築する瞬間」であり、古代エジプト文化に代表される象徴主義から脱却し、古代ギリシャに代表される哲学・抽象の文化への転換を示す瞬間でもあったと見る。古代エジプト文化が常に他のものを指し示す象形文字による意味体系だったのと比べると、西洋文化は人間の理性を極めて重んじ、謎を嫌う文化だと言えよう。オイディプスは媒介や曖昧さなしに思想を表現できると考える「哲学者」の原型なのである。オイディプスが「人間」という答えでスフィンクスに勝利した場面は、神秘よりも人知や理性、女性性よりも男性性の優位が宣言された瞬間なのである。

このように「語り」は、権力構造を維持・再生産する役目を果たしている訳だが、バトラーの文章が明らかにしているのは、権力が実は、他者（被抑圧者）に大きく依存しているという点である。ヘーゲルの「主人」と「奴隷」の話を思い出す人もいるだろう。「主人」は、「奴隷」からの尊敬や畏怖のまなざしによって自分のアイデンティティーを構築し、その点において奴隷に依存していると言えるのだ。この他者依存こそ、フェミニスト・プロジェクトが既存の権力構造を転覆させるために利用できるものとなるのではないだろうか。「主人」による統治は、「奴隷」側の革命的パフォーマンスによって打倒可能なのである。「主人」のアイデンティティーが固定したものではなく、維持するための反復的な確認を要求するとしたら、「奴隷」のそれも同様である。この議論をジェンダー的階級構造に当てはめると、現在の女性の地位には本質的な裏付けも、未来永劫続く必然性もないということになる。

オイディプスの他者依存を見てみよう。スフィンクスは、オイディプスが立派な人間（男性）になるために必ず乗り越えねばならない「怪物的母性」(Monstrous Maternal)を象徴している。

2) 「我が子に殺される」という神託を恐れた父ライオスによって捨てられたオイディプスは拾われてコリントス王の養子となる。成長し「父を殺して母と結婚する」という神託を受けた彼は、コリントス王夫妻の家を出る。旅の途中で彼は実父と知らずにライオスを殺す。テーベの町では怪物スフィンクスが「初め四つ足、次に二つ足、最後に三つ足の動物は何ぞ？」という謎を出してはそれに答えられない人間を食べている。オイディプスはこの謎を「それは人間だ！」と解いたのでスフィンクスは岩から飛び降りる。この手柄で彼はテーベの王となり実母をそれと知らずに妻とし、神託が成就する。

ところが、よくよく読むと、スフィンクスは真の恐怖を覆い隠す代替物であることがわかる。直前にオイディプスは実父を殺害しており、「家父長権威の根本的な脆さ」に潜在的に対面している。父を殺して、今度は自分が父となった時に自分が殺される可能性にも迫られたことになるのだ。この「真の恐怖」に対処できないオイディプスに、代理恐怖として利用されたのがスフィンクスである。彼女を倒すことで、オイディプスは自分の力を確認しようとしたと言えよう。換言すればこの怪物は、「家父長制度」が自らのシステムを支えるために生み出した構築物であり、権力は怪物なしでは力を維持できないことになる。バトラーはこれを評して「男性的主体の女性的他者への過激なまでの依存」と述べている。

この依存度合いは非常に高いため、『オイディプス王』でも怪物がオイディプスによって殺されたとはなっていない。スフィンクスは身を投げるのだ。スフィンクスがオイディプスに完全に負けたとは言えないこのあやふやさが実はオイディプスにとって重要と言える。彼は勝利の幻想を楽しむ一方で、「真の恐怖」の代替物としての怪物を存在させておく必要があるのだ。

しかしながら、怪物の生死をはっきりさせずにおくと、非常に厄介な結果が生まれる。それは、怪物がいつか彼の元に戻ってきて、究極の恐怖を彼に突きつけるかもしれないということだ。そこでオイディプスは自ら眼を突き、盲目となる。恐怖の正体を見ることがないように……。怪物はいったん敗北しても舞い戻ってくる。実際、オイディプス物語以降の世界の文学には怪物や幽霊があふれている。

3. 女性作家と逆転劇

女性作家の中にはこうしたモチーフを逆転利用しているものもある。女性文学にはしばしば「怒れるダブル」や「狂女」が登場するが、それらは怪物や幽霊と同じ役目を果たしている。例えば、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』³⁾に登場する怪物は、貞淑な女性登場人物たちの「怒れるダブル」とされる。その時代の社会慣習により、女性登場人物たちは自分たちの受ける抑圧について公に糾弾できないが、怪物が彼女たちの代弁者となっている。例えば、主人公のヴィクター・フランケンシュタインは知的興味を追及する自由を満喫しているが、作中の女性たちにそのような自由はなく、家事労働を引き受けて家に留まっている。そんな中現れた怪物は知識欲に燃え、学習の機会を奪われたことへの怒りを露にして大自然を駆け巡り、造り主を追いまわす。まさしく女性たちの心の中の声を体現しているのである。もし「大人しく貞淑であれ」とする社会の不文律に従うならば、当時の女性は周囲の男性に歯向かうこ

3) 科学者ヴィクター・フランケンシュタインは、様々な遺体から美しい部分を集めて、究極の美しい人間を造り出そうと試みる。ところが出来上がったのは世にも醜悪な怪物だった。ヴィクターは怪物を捨てて逃げるが、怪物は自分の造り主を追いまわし、ヴィクターの周囲の人間たちを殺してゆく。最終的な対決でヴィクターは死に、怪物は姿を消す。

とはできず、家庭の中に埋もれ忘れ去られ、物語の中で姿を消してしまう他ない。そんなケースにおいて、怪物や幽霊たちは彼女たちの声を代弁する。

女性作家にとって、代弁者たる幽霊の重要性は高い。彼女たちにとって、社会慣習は男性作家にとってよりも、もっと厄介なものだったのだ。作家が絶対的に必要とする表現・言論の自由は、多くの文化で女性に完全な形で与えられてはいなかったからだ。

世界で最初に怪物的キャラクターが登場する小説は、実は日本の『源氏物語』なのだが、注目すべきはこれが女性によって書かれたという事実だ。美しい主要ヒロインたちはほとんど光源氏を批判することはない。だが、この物語には、副次的な登場人物、幽霊、喜劇的な老女など、少々グロテスクな登場人物も存在し、常に主旋律のラブ・ストーリーとは一味違ったストーリーを示唆することによって『フランケンシュタイン』の怪物的役割を果たしている。

例えば、紫の上は極めて間接的で曖昧にしか感情を表現することはなかったし、面と向かって源氏を批判することなど決してなかった。しかし登場する生霊は光源氏を正面切って非難する。紫の上は源氏が三の君の降嫁を受け入れた後、裏切りに苦しみながら死を迎える。彼女の運命は西洋文学に登場する「家庭の天使」的な女性キャラクターと酷似している。前述した『フランケンシュタイン』に登場する女性たちも、みな悲惨な死を遂げる。彼女たちに代わって怒りを露にするのは怪物である。

この構造を『源氏物語』で見てもよい。女の霊が最初に登場するのは、源氏が夕顔との密かなアバンチュールを楽しんでいた時のこと。美しくおとなしい夕顔は、源氏と一緒にうらぶれた東屋にいる時に発作を起こして死んでしまい、源氏は霊が現れるのを目撃するがその正体はわからない。その霊は「あなたのことを崇めてきたのに、あなたは私のもとを訪ねてくれず、何のとりえもないこんな女をそばにおいてかまけている」と源氏を責める。その言葉と、その霊が「極めて美しい女性」であったことから、源氏と愛人関係にあった六条御息所の生霊であることが示唆される。

葵の上のエピソードでは、この霊の正体がよりはっきりする。ある時、六条御息所は、愛人という立場のために、正妻の葵の上にひどい屈辱を味わわされる。その直後、葵の上が発作を起こして倒れ、憑依（ひょうい）と診断される。霊媒が呼ばれ、源氏は妻の枕もとに呼び出される。その時、彼は、妻の顔と声が六条御息所のものに変貌しているのを見つけて驚愕する。

この憑依で重要な点は、源氏以外は誰もこの霊を見ていない点、この霊現象が光源氏のみを対象としている点である。マサチューセッツ大学助教授のドリス・バーゲンは、憑依する側とされる側の相互作用を指摘する。憑依の原因を、乗り移る側の嫉妬ばかりに求めるのは不適切で、憑依する霊と憑依される者は非難行為において一つに結ばれているというのである。「心理的に同盟を結んだ女性たちは、抑圧された怒りを第三者（源氏）に対して向け、そしてその男性が愛人や妻たちにひどい扱いをしても咎めない社会に対しても向ける」のであって、「憑依する霊は一見『被害者』に対して害を及ぼすかに見えるかもしれないが、その霊は被害者女

性が共有する苦悩を表明する機能を持っている」というのだ。光源氏のみを怯えさせることで、「葵の上と六条御息所は、憑依という恍惚状態の中、それぞれが三角関係のライバルと溶け合うことができ、最悪のライバルが復讐においては最高の仲間となるのである」。ここにまたも興味深い論点が現れる。葵の上と六条御息所は、ライバル関係にありながらSisterhoodを築くのである。女性が発言権を持たない社会にあって、幽霊は媒介として機能し、彼女たちに発言の機会を与え、女性の共同体を作るのだ。こんな幽霊が登場する世界最初の小説が、なんと日本女性によって書かれたというのは、実に注目すべきことである。

4. 理性と身体性の権力闘争：ゴシック

西洋文学においてグロテスクな幽霊や怪物が頻出するのは、ゴシック文学の分野である。ブリistol大学教授のデイヴィッド・パンターによれば、そもそもゴシック物語が登場したのは、源氏物語から遅れること七、八百年、「理性の時代」と言われた十八世紀イギリスである。ゴシックの作家には女性が多いのだが、前章の分析のように、幽霊や怪物のモチーフを通して女性作家が発言権を作り出していたと考えれば、それは当然のことかもしれない。代表的な作品に先にも述べた『フランケンシュタイン』がある。

『フランケンシュタイン』は、科学（つまりは人知）の偉大な力を信じた人間の話である。ヴィクターは、多くの死体から身体部位を集めて、新たな生命体を作り出す科学実験に夢中になった。オイディプスといい、ヴィクターといい、人間は生と死の謎に常に惹きつけられていた。だが一方で、自らの死すべき運命について考えたくない気持ちもあり、最終的な説明がなされるのを恐れている。この恐怖と不思議な魅力がホラー映画の流行を支えている。ヴィクターも恐ろしい生死の謎の追求にはまってしまった人物である。

しかしヴィクターがオイディプスと違っていたのは、自分の勝利が暫定的なものであることを悟らず、究極の勝利を求めてしまったこと、つまり「神の掟」の先の領域に到達できると信じたことにある。当然ながら、彼を待ちうけていたのは「真の恐怖」との遭遇であった。ヴィクターの名は「勝利」を表すのだが、[C]、彼は自分が造った肉体から目を逸らしてしまう。だがその肉体は、造り主をどこまでも追ってくる。[D]であったはずの肉体が [E]に対して反乱を起こしたのである。

人は幼児体験に起因する自らの根源的な弱さが、脳にインプットされている。しかし、成長するに従ってその記憶を抑圧しているものである。ヴィクターは、今回その記憶を目覚めさせてしまったのだ。彼にとって、恐怖は醜い怪物そのものから発生するのではなく、自分が無力だという事実、「神」を超えられないという事実から来る。

5. とり憑かれた文学

これまで見てきた通り、ゴシックには「規範」, 「憑依」, 「肉体」, 「欲望」が深く関わっている。「欲望」は決して完全に満たされることはないため、必ずや幽霊が憑く場所となる。その意味で『源氏物語』は実にゴシック的だと言えるだろう。六条御息所の魂が身体を離れたということは、彼女が肉体を伴った姿（あるいは、肉体に閉じ込められた状態）では、源氏への感情を表現できなかつたことを示している。生霊となることによって、彼女は男女間の通例の束縛を超え、ルールを超えたところで発言することができたのである。

憑依、というモチーフは、ここで、抑圧されていた他者が他の方法では聞かせられなかった声をなんとか聞かせる場となっている。彼女の現実と源氏の世界とは、この憑依現象が危うい掛け橋となってつながっている。ここを通して彼女は源氏の世界を転覆させることも可能なのだが、権力構造が繰り返し反復されなければ維持できないのと同様に、この転覆行為も繰り返し行われなければ発効しない。したがって、これが憑き物となるのは当然のことなのかもしれない。『源氏物語』で構築された物語の迷路は、西洋のゴシック小説の迷宮となって繰り返しあらわれ、理性的で慣習的な世界と、非理性的で非慣習的な世界をつなぐ危うい掛け橋が再構築される。変革の試みは、もしかしたら最初は失敗するかもしれない。だが二度目、三度目には成功するかもしれない。文学の世界で起こっていることはこの繰り返しなのではないだろうか。

六条御息所の生霊と同様、『源氏物語』そのものも日本文学の歴史にとり憑いている。実に多数の書物が『源氏物語』から派生し、今日まで続いているのだ。最近ではライザ・ダルビーが『紫式部物語』という小説を英語で出版し、『源氏物語』が英米文学にもとり憑いたことを示している。

もしかしたら『源氏物語』は書かれた当時の権力構造にはなんら影響を与え得なかつたかもしれない。だが現代の文学者たちはより強力にゴールを追及しており、Objectの側の勝利も不可能ではなくなっているかもしれない。実際十八世紀当時のゴシック小説では理性が勝利を収めていたが、現代ゴシックにおいてはしばしば逆転しているのだ。例えば1847年のシャーロット・ブロンテによる『ジェイン・エア』に登場した狂女は、後の時代の批評作品に何度も取り上げられ、また1968年のジーン・リースによる『サルガッソーの広い海』という小説では一人の主人公として転生している。もともとはグロテスクな他者として描かれた彼女が、これら後代の作品の中で一人の主体として描き直されたのだ。日本でも同様の動きがあり、源氏物語を始め、様々な物語の「語りなおし」がある。怪物や幽霊たちは、何度も現れてはもともとの作品の曖昧さ・隙間に読者の注意を引きつける。こうした行為が繰り返されることによって、被抑圧者の声が次第に発掘されていくのである。長い歳月を要する戦略だが、確実に権力構造を変化させるものである。これが文化の壁を越える動きであることは、注目に値する。東西で主体と客体の階級構造、そしてジェンダーの階級構造も揺らいでいく中で、比較文学の重要性はますます増大している。

参考文献

駒尺喜美『紫式部のメッセージ』 朝日新聞社, 1991

ソポクレス『オイディプス王』 藤沢令夫訳、岩波文庫、1967

Bargen, Doris G. "Spirit Possession in the Context of Dramatic Expressions of Gender Conflict: the Aoi Episode of the Genji monogatari." Harvard Journal of Asiatic Studies 48.1. (June, 1988). 95-130.

Butler, Judith. Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity. New York: Routledge, 1990.

Foucault, Michel. The History of Sexuality, Vol.1: An Introduction. London: Penguin, 1979.

Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination. New Havens: Yale UP, 1979.

Mulvey, Laura. "The pre-Oedipal Father: the Gothicism of Blue Velvet." Modern Gothic: A Reader. Ed. Sage, Victor and Allan Lloyd Smith. New York: Manchester UP, 1996. 38-57.

Punter, David. Gothic Pathologies: The Text, The Body and The Law. Basingstoke: Macmillan, 1998.

Said, Edward. Orientalism: Western Conception of the Orient. [1978]. Harmondsworth: Penguin, 1995.

Spivak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" Marxism and the Interpretation of Culture. Ed. C. Nelson and L. Grossberg. Basingstoke: Macmillan Education, 1988. 271-313.

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 

a b c d

1. 筆者によると、幽霊や怪物が住むのは「隙間」であるという。この「隙間」の説明として、最も適しているのはどれか。
 - a. 二国間国境部の相互不可侵地帯にある「隙間」
 - b. 政権が交代する際に発生する権力不在の「隙間」
 - c. 不完全な抑圧により被抑圧者の不満が垣間見える「隙間」
 - d. 裏切りや肉親の死などで、孤独感により心にできる「隙間」

2. 「歴史」(History) は「男の物語」(His Story) であるというフェミニズムの主張が存在する。本文から判断して、この主張に含まれる考えとして適切なものはどれか。
 - a. 世界の政界や経済界などで活躍し、世の中を動かしてきたのは男性である。
 - b. 「歴史」は戦争や政治など男性の業績に偏ったものであり、女性は除外されている。
 - c. 「歴史」を勉強することは、男性には非常に役に立つが、女性にはあまり役に立たない。
 - d. 「歴史」は客観的で、男性的な考え方が多く反映されているが、女性的な主観は含まれていない。

3. 「女性」が「人間」に対比される謎の存在だったことを示す例として、適切なものはどれか。
 - a. かつて日本では田植えをするのは女性であった。
 - b. 中国では女性の足を纏足により小さくしていた。
 - c. 先進国では細身の女性が好まれるが、南洋では太目の女性が好まれる。
 - d. 古代エジプトでは王が死ぬと、その妻も共に埋葬された。

4. 筆者は、(男性的)人間主体が、「女性の肉体をアートに変え異化し搾取する」ことによって、「肉体」や「生死」をコントロールするという「錯覚」を享受してきた、と述べている。その主張のなかにふくまれている考えとして適切でないものはどれか。
 - a. 「アートに変える」という行為には詐術的な操作がひそんでいる。
 - b. アートという制度のなかでは、「錯覚」を楽しむことが重要である。
 - c. 異化作用によってコントロールしているのは、じつは「肉体」や「生死」の代理表象物でしかない。
 - d. アートの次元で「搾取する」ことのできる自分を、「肉体」や「生死」そのものを自由にできる権力者と混同してはならない。

5. 「帝国主義」と「オリエンタリズム」についての説明文で、正しいものはどれか。
- 帝国主義もオリエンタリズムも、他国の本来の性質を無視する点では同じである。
 - オリエンタリズムは、東洋の文化を西洋が高く評価するもので、根本的に帝国主義とは異なる。
 - 帝国主義は現在の世界ではもはや見られない動きだが、オリエンタリズムは今でも各地で見られる。
 - 帝国主義は領土を広げる活動だが、オリエンタリズムは異国の文化を輸入しようとする文化活動である。
6. 本文中のスピヴァックの言葉は、第三世界の女性にとってのSubjectとObjectの問題の二重性を指摘している。その二重性とはどういったものであるか。
- 母としての責任と妻としての義務
 - 家庭での家事労働と社会での賃金労働
 - 被支配国民として受ける抑圧と、男性から受ける抑圧
 - 男性にとって魅力的な女性であることと、自己実現の葛藤
7. 本文の論旨からみて「女流文学」という呼び方は、
- 男性作家の文学と対等の立場を示している。
 - 女性らしさを追及している文学を示唆している。
 - 男流文学という言い方がなされないのが不適当である。
 - 女性作家が「家庭の天使」というテーマを主に扱っていることに起因する。
8. 筆者は、日本の女性は「何か発言したくとも、つい最近になるまでそのための適切な用具、機会を持ってこなかった」と述べている。この困難な状況を構造的に共有しているとはいえないのは次のうちどれか。
- 子ども
 - 政治権力者
 - 交通事故被害者
 - ハンセン病患者
9. 本文3ページの英文引用箇所の空所 [A] と [B] を埋めるのにふさわしい組み合わせはどれか。
- A: effects B: causes
 - A: expressions B: results
 - A: ideas B: sources
 - A: thoughts B: motives

10. 本文中で論じられている「ジェンダー表現」に該当するものはどれか。
- 蝉は雄が鳴く。
 - 女の子は髪にリボンを飾る。
 - 途上国の子どもは、貧しいけれど、目に純粋な輝きがある。
 - 「太陽」はフランス語では男性名詞だがドイツ語では女性名詞である。
11. 本文の論旨によると、アイデンティティーとはどのようなものか。最も適した文章を選べ。
- 性別により備わっており、表現はそこから派生して個性となっている。
 - 人のアイデンティティーは理性から発生しており、謎を嫌う傾向がある。
 - あるアイデンティティーを表現するときに、そのアイデンティティーが構築される。
 - 生まれつき持っているもので、それを自由に表現することが人の幸福感につながる。
12. 支配構造を維持するための反復（これをAとする）と、それに対する異議申し立ての繰り返し（これをBとする）とに違いがあるとすれば、それはどのようなものか。
- Aは有史以来のものだが、Bは近代以降の現象である。
 - AがなされるためにはBも必要であるが、BがなされるためにはAは必要ない。
 - Aは習慣化され無自覚的に受け入れられがちなのに対して、Bは自覚的になされる。
 - Aは独裁政治体制において強制的に、Bは民主主義社会において自発的におこなわれるものである。
13. 本文の論旨によると、オイディプスにとって最大の恐怖とは何であるか。
- 手にいれた権力の座の不安定さを思い知らされること。
 - 母が自分の正体を知り、怒りと嘆きで発狂してしまうこと。
 - 自分が殺害した父親が幽霊となって復讐しに帰ってくること。
 - スフィンクスが生きていて、自分に復讐するためにやってくること。
14. 本文によれば、権力はどのように維持されるものであるか。
- 権力側が抵抗を一切禁止することによって。
 - 権力側が抵抗勢力を実力で封じ込めることによって。
 - 様々な闘争の場で、絶対的な力の優劣が露呈することによって。
 - 擬似的な権力闘争の場で、権力側が勝利を繰り返し宣言することによって。

15. スフィンクスの敗北が曖昧にされているのはなぜか。本文の論旨からみて、理由として最も適切なものを選べ。
- スフィンクスは、曖昧さを特徴とする象徴文化の代表的な産物であるから。
 - オイディプスにとって、スフィンクスは生命をつかさどる母性の象徴であるため。
 - スフィンクスが敗れ去ると、オイディプスは父殺しの罪に一人で直面するはめになるから。
 - スフィンクス殺害者としての罪悪感を、オイディプスが感じずにすむようにするため。
16. 次のうち、オイディプスとスフィンクスの関係と最も似ているのはどれか。
- XとYは犬猿の仲で、絶交している。
 - Xは自分をいじめた者への仕返しに、その弟Yを泣かせた。
 - Xは好きな相手に告白ができないので、Yに伝言を頼んだ。
 - XとYはとても仲がよいが、時に大喧嘩をすることもある。
17. 本文によれば、「主人」と「奴隷」の関係を英語で言い表すとすると、次のどれが適切か。
- charity
 - hierarchy
 - hostility
 - interdependency
18. 文脈に沿って考えたとき、女性作家がヒロインとして「家庭の天使」的な女性を置いたのはなぜか。理由として適当なものを選べ。
- 女性作家にとって、そのような女性が理想だったから。
 - そのような女性を中心に据えることで、批判をとりあえず避けられるから。
 - 天使のような女性を描くことによって、女性の地位を向上させたかったから。
 - 「家庭の天使」は当時の家庭の中心に存在し、自由と権力を所有していたから。
19. 『フランケンシュタイン』で最後に怪物が消えてしまうのはなぜか。本文の論旨に従って考えたとき、理由としてふさわしいものを選べ。
- ヴィクターが死んだら、代弁者としての存在意義はなくなったから。
 - 当時の女性たちと同じ運命を辿るのが、怪物にとっては自然な最期だったから。
 - 世の中の不正を訴えるためには、死んで抗議することが一番強い方法だったから。
 - ヴィクターがいなくなって、はじめて自分の願い通りに動けることに気付いたから。

20. 『フランケンシュタイン』が書かれた時代の女性作家にとって、幽霊や怪物はなぜ重要な題材であったのか。次のうちから適切なものを選び。
- それらが女性作家たちの悩みを実際に解決してくれたから。
 - それらが女性作家たちの心の声を発する場として役立ったから。
 - それらが女性特有の想像力から生まれたユニークな存在だったから。
 - それらが当時の読者層に好評で、女性作家たちの人気を支えていたから。
21. 『源氏物語』について、次の文章のうち正しいものはどれか。
- 『源氏物語』は複数の主人公を持つ。
 - 『源氏物語』は作者の自伝的小説である。
 - 『源氏物語』は光源氏の死で物語が終結する。
 - 『源氏物語』の生霊は『フランケンシュタイン』の怪物を模倣している。
22. 『源氏物語』で六条御息所の霊が果たす役割のうち、適切でないものはどれか。
- 六条御息所の嫉妬心を源氏に伝える。
 - 憑依された女性の苦悩を源氏に伝える。
 - 憑依された女性と六条御息所を女性同士の絆で結ぶ。
 - 源氏が女性に対して行なった非道を源氏の周囲に知らせる。
23. 「憑依」の英訳として、最も適した語は次のうちどれか。
- curse
 - exorcism
 - possession
 - sign
24. 本文7ページ下から7行目の[C]にあてはまる語句として最も適したものは次のうちどれか。
- 意外にも
 - 皮肉にも
 - 不幸にも
 - 予想通り
25. 本文7ページ下から6行目の[D]と[E]を埋めるのに適当な語の組み合わせは次のうちどれか。
- D: Subject E: Object
 - D: Object E: Subject
 - D: Object E: Others
 - D: Subject E: Others

26. 「欲望」はなぜ「幽霊が憑く場所となる」のか。適切な説明を選べ。
- Subjectは、欲望をつうじて自分をObjectに変換するから。
 - Subjectの欲望するObjectはつねに恐怖と魅力を兼備する存在となるから。
 - SubjectにとってObjectへの欲望は代替にすぎず、抑圧された声が真の欲望との隙間に出現するから。
 - あらゆる欲望は、死の欲動につながっており、幽霊の出現しやすい場をSubjectのなかに形成するから。
27. 本文の論旨によれば、「幽霊」とはなんであるといえるか。
- SubjectがObjectに抱く幻影である。
 - ObjectがSubjectに提供する幻影である。
 - Objectにたいする、Subjectの真実の声の表明である。
 - Subjectにたいする、Objectの抑圧された声の表明である。
28. 本文の論旨に従ったとき、『源氏物語』や『ジェイン・エア』に続編や外伝などが次々と制作される理由として、最も適切なものはどれか。
- 幽霊の恐怖が読者をひきつけるから。
 - ヒロインが時代を超えて魅力的だから。
 - 物語の謎が新たな作家の創造力を刺激するから。
 - 時代の変遷によって別の小説技法が流行するから。
29. 『源氏物語』は女性による作品だが、次のうち女性作家によるものはどれか。
- 徒然草
 - 方丈記
 - 土佐日記
 - 更級日記
30. 本文で取り上げた「憑依」と最も似た働きを行なうのは、次のうちどれか。
- 説法師
 - 呪術師
 - 薬剤師
 - 霊媒師

31. 本文によるとゴシック小説が盛んになったのは18世紀であるが、次の歴史的事実のうち、別の時代の出来事はどれか。
- 産業革命
 - 宗教改革
 - フランス革命
 - アメリカ独立戦争
32. 筆者の展開する論理に従ったとき、旧植民地被支配国の作家が、旧宗主国にたいして文学的価値の転覆を図ろうとするさいに、有効に作用すると思われる方法は、次のうちどれか。
- 国民文学読者層にむけて、民話的語り口の作品を民衆の母語で書く。
 - 旧宗主国の文学的規範に言語的にも美学的にも同化した優れた作品を書く。
 - 旧被支配国の作家が、旧宗主国の言語で実践された前衛的手法を母語での語りに適用する。
 - 旧宗主国の言語を用いて、旧被支配者側の声を発し、自分たちに固有の考えを旧宗主国に認知させる。
33. フェミニズム理論およびジェンダー理論が実践するものはどれだといえるか。
- 生物学的性差を認識の地平から排除すること。
 - 支配権力を男性主体から女性主体へ奪還すること。
 - ジェンダー的性差に真のアイデンティティーをもたらすこと。
 - 支配構造と一体化した常識を支えている諸前提を問題化すること。
34. 本文の論旨によると、「科学」と対比される概念は次のうちどれか。
- 神秘
 - 自然
 - 文学
 - 芸術
35. 本文8ページの「語りなおし」とはどのような行為であるか。適切なものを選べ。
- 原作を忠実に再現する行為。
 - 原作とは無関係の物語を語る行為。
 - 原作の曖昧さを補ったり、異なる視点で語る行為。
 - 原作の誤りを修正したり、より正確な表現で語る行為。

36. 「マンガ」は、かつては低俗なジャンルとみなされていたが、いまでは日本文化の担い手として国際的に認知されている。ここに見られるのは次のうちどれか。
- 以前はグロテスクな「他者」だったものが、のちに「一人の主体」となるプロセス。
 - 芸術の探求における言説の主役は、かつては倫理学であったが、いまでは美学であるという変化。
 - 日本の文化が、西洋の「テキスト」によって再教育され、主体と客体の間で宙吊りにされるというメカニズムの持続。
 - 「規範」を逸脱したものが、認知された文化制度の中へ回収されることで、権力が再構築されるというメカニズム。
37. アメリカ人による「めがねに出っ歯」という「奇妙な日本人像」と同様のとまどいを描かれた相手に与えうる表象として、該当しないものはどれか。
- 男による女の表象
 - 画家による自己の表象
 - 白人によるアラブ人の表象
 - ヘテロセクシャルによるホモセクシャルの表象
38. “Gender Performativity” についてのジュディス・バトラーからの引用（本文3ページ）と、本文末尾に記された筆者の考えを参考にすると、筆者の構想する比較文学研究の性質はどう言い表すことができるか。最も適切なものを選び。
- 機能的である。
 - 戦略的である。
 - 存在論的である。
 - 美学的である。
39. 筆者の展開する論理に従ったとき、幽霊について考えることが重要である理由は何か。最も適切なものを選び。
- 幽霊の存在によって、男性と女性の対立が弱められるから。
 - 反逆者としての幽霊が、世界の不平等を改善する役割を果たすから。
 - 幽霊に注目することで、抑圧された声に耳を傾けることができるから。
 - グロテスクな幽霊には、人間が本来持つ死への憧憬があらわれているから。